

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10733

研究課題名(和文) がん患者のコンフォートを促進する支援プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of support programs to promote comfort for cancer patients

研究代表者

金正 貴美 (Kinsho, Takami)

香川大学・医学部・講師

研究者番号：00335861

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まずがんをもつ人の情報ニーズ(欲求)とコンフォート(心地よさ)、健康の実態を明らかにした。病気をもちて生活するための情報ニーズで、平均値が高い設問は、「治療を受けた体験者と語り合って得られる情報がある」であり、標準偏差も低めであることから、多くの人がもつ情報ニーズであることが明らかになった。語り合って自身の置かれている状況が整理され必要な情報が得られるプログラム試案を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

人間のコンフォート尺度の合計得点と下位尺度の【つながりを感じている】、【楽しい】、【平穩無事である】、【くつろいでいる】、【心地よく運動している】、は、がんを持つ患者の方が一般の人よりも高く有意差が認められた。こうした心地よい状態を実感できるよう、語り合い、リラックスや心地よい運動を設けるプログラム試案を得た。全国のがん患者会でのプログラム作成における示唆の一助となると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study first identified the information needs, comfort, and health status of people with cancer. The question with the highest mean for information needs for living with the disease was "Information I can get by talking with people who have gone through treatment," and the standard deviation was low, indicating that this is an information need that many people have. We received a proposal for a program that would allow participants to talk to each other, organize their own situation, and get the information they need.

研究分野：成人看護学、がん看護学、終末期看護学

キーワード：がん コンフォート 支援プログラム 情報ニーズ

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究ではがんを持つ患者のコンフォートを促進する支援プログラムを開発することを目的とする。この支援プログラムの開発は、がん患者の主体性を高めその人らしい生活を可能にし、標準化された支援プログラム作成への新たな示唆となると考える。研究課題の核心をなす学術的「問い」を、がんを持つ患者のコンフォートの特徴はどのようなものかそしてそのコンフォートを促進する支援プログラムとはどのようなものかとした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、まずがんを持つ患者を対象とし情報ニーズとコンフォートの調査(量的記述的研究)を行い、既存の成人のデータ(金正,野嶋,2017)と検討し、がんを持つ患者の特徴を抽出する。次にその結果をもとにコンフォートを促進する支援プログラムを開発する。

3. 研究の方法

1) 対象

中四国のがん患者会に所属し、がんと診断され、治療を経験した20歳以上の人である。

2) データ収集方法

中四国のがん患者会にアンケート調査の協力依頼を行い、がん患者会の代表の方から承諾が得られた組織に協力頂ける数のアンケートをお送りした。そしてがん患者会の代表の方に、会員への郵送でアンケートの配布を依頼した。返送は会員の自由意志に基づき、記入された場合、アンケート用紙が郵送法で返送された。

3) 調査期間

2022年12月1日～2023年5月31日であった。

4) 設問内容

質問紙は、1.対象者の概要、2.情報ニーズ、3.人間のコンフォート(心地よい状態)、4.家族からのサポート、5.精神的健康、6.健康関連 QOL(生活の質)で、構成された。

5) 分析方法

6) 倫理的配慮

調査に際して、協力施設が特定されないように、組織や対象者の匿名性を保証した。調査の協力は自由意思に基づき、質問紙を郵便ポストに投函するまではいつでも自由にとりやめることができ、参加を取りやめることによって不利益は全く生じないことを約束した。

本研究は、香川大学医学部倫理委員会の承認(2022-063)を受けて実施した。

4. 研究成果

中四国のがん患者会で調査協力を同意を頂いた21団体に、合計581部のアンケートを送付し、168部が回収できた。そのうち欠損値が少ないアンケート用紙は、162部であった。回収率は28.9%、有効回答率96.4%になった。

1) 対象者の概要

男性34人(21.0%)、女性123人(75.7%)、無回答5名(3.1%)であった。

年齢は、40歳代5人(3.1%)、50歳代28人(17.3%)、60歳代51人(31.5%)、70歳代58人(35.8%)、80歳代13人(8.0%)、90歳代人(0.6%)であった。

治療中の有無について、治療中の人は82人(50.6%)、治療中でない人は75人(46.3%)、無回答が5人(3.1%)であった。

患者同士の交流会の参加の有無について、参加したことがある人は、141人(7.0%)、したことがない人は、16人(9.9%)、無回答が5人(3.1%)であった。

余暇時間を十分楽しんでいると回答した人は、112人(69.1%)、いいえと回答した人は45人(27.8%)、無回答が5人(3.1%)であった。

経済的に安定していると回答した人は、128人(79.0%)、いいえと回答した人は29人(17.9%)、無回答が5人(3.1%)であった。

就業形態について、正規の社員・職員は9人(5.6%)、パート・アルバイト・契約社員・嘱託は30人(18.5%)、事業経営は8人(4.9%)、家業手伝いは3人(1.9%)、在宅での仕事は6人(6.0%)、専業主婦・主夫は53人(32.7%)、無職は41人(25.3%)、無回答は6人(3.7%)の回答があった。

就業している人の内訳について、職場に上司や同僚からのサポート体制があると回答した人は、35人(21.6%)、ないと回答した人は22人(13.6%)であった。

仕事をするために十分な人数のスタッフがいると回答した人は、24人(14.8%)、32人(19.8%)であった。職場の人間関係は良好だと回答した人は、49人(30.2%)、いいえと回答した人は8人(4.9%)であった。

2) 情報ニーズ

病気をもって生活するための情報ニーズについて、18の設問を設定し、それらに対し、次の質問を読んでどの程度そう思うのか、「5: そう思う-3: どちらでもない-1: そう思わない」の5つの程度から1つを回答いただいた。各設問において、回答肢ごとの回答数、割合、設問の回答数、平均値、標準偏差を算出した。病気をもって生活するための情報ニーズの18の全ての設問の平均値は3.37、標準偏差は1.17、最小値1、最大値5であった。

病気をもって生活するための情報ニーズの18の設問において、平均値が高い設問は、以下のとおりであった。

最も平均値が高い設問は、「10 治療を受けた体験者と語り合って得られる情報がある」の平均値は4.1、標準偏差は1.1だった。2番目に平均値が高い設問は、「11 分かっていることでも、もう一度説明してもらいたい情報がある」の平均値は3.8、標準偏差は1.1だった。

3番目に平均値が高い設問は、「9 医療者に質問して得られる情報がある」の平均値は3.7、標準偏差は1.1だった。4番目に平均値が高い設問は、「2 自分に合った検診(セルフチェック)がわかる情報がある」の平均値は3.6、標準偏差は1.1だった。5番目に平均値が高い設問は、「8 治療の度に、説明してもらいたい情報がある」の平均値は3.6、標準偏差は1.2であった。

病気をもって生活するための情報ニーズの18の設問において平均値の低い設問は以下の通りであった。

最も平均値が低い設問は、「5 病院付き添いや家事を代行してくれる情報がある」の平均値は2.7、標準偏差は1.2だった。2番目に平均値が低い設問は、「17 健康食品を見極めて正しく用いるための情報がある」の平均値は2.8、標準偏差は1.2だった。3番目に平均値が低い設問は、「14 不眠を改善できる情報がある」の平均値は3.1、標準偏差は1.1だった。4番目に平均値が低い設問は、「4 治療と仕事の両立支援についての情報がある」の平均値は3.1、標準偏差は1.2だった。5番目に平均値が低い設問は、「12 食欲不振時も、食べていくための情報がある」の平均値は3.2、標準偏差は1.1だった。

3) 家族からのサポート

家族からのサポートについて、13の設問があり、それらに対し、次の質問を読んでどの程度そう思うのか、「5: 全くそうである、4: かなりそうである、3: まあまあそうである、2: あまりそうでない、1: 全くそうでない」の5つの程度から1つを回答いただいた。各設問において、回答肢ごとの回答数、割合、設問の回答数、平均値、標準偏差を算出した。

家族からのサポートの13の全ての設問の合計の平均値は、44.6、標準偏差は15.8、最小値0、最大値65であった。

家族からのサポートの13の設問において、平均値が高い設問は、以下の通りであった。平均値が最も高い設問は、「6 あなたにとって、ご家族から好意を持たれることは、大切なことですか。」の平均値は4.3、標準偏差は0.9だった。2番目に平均値が高い設問は、「4 あなたのご家族は、あなたのことを信じて、あなたの思うようにさせてくれていますか。」の平均値は3.9、標準偏差は1.1だった。3番目に平均値が高い設問は、「9 あなたが経済的に困ったとき、あなたのご家族は頼りになると思いますか。」の平均値は3.9、標準偏差は1.2だった。4番目に平均値が高い設問は、「5 あなたのご家族は、あなたのことを好ましく思ってくれていると思いますか。」の平均値は3.8、標準偏差は0.1だった。5番目に平均値が高い設問は、「12 何か悩み事ができたとき、あなたのご家族は助けてくれると思いますか。」の平均値は3.7、標準偏差は1.2だった。

4) 人間のコンフォート(心地よい状態)尺度と家族からのサポート

本調査におけるがんをもつ患者の162部と既存の成人の719部(金正, 野嶋, 2017)を検討し、対象の特徴を抽出した。総数の881部の平均値は143.95、最小値42、最大値209、標準偏差26.87であった。

(1) t検定

本調査におけるがんを持つ患者と既存の成人のデータ(金正, 野嶋, 2017)の検討を行うために、人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の下位尺度得点と家族からのサポートについて、t検定を行った。この結果を表1に示した。

人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合計得点は、がんを持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者150.22(SD32.19)点、一般142.26(SD25.24))。

人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合下位尺度【つながりを感じている】は、がんを

持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者 30.9(SD6.82)点、一般 29.6(SD5.7))。人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合下位尺度【楽しい】は、がんを持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者 18.16(SD5.13)点、一般 16.71(SD4.29))。人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合下位尺度【平穩無事である】は、がんを持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者 10.38(SD3.38)点、一般 8.62(SD3.43))。人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合下位尺度【くつろいでいる】は、がんを持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者 7.48(SD2.12)点、一般 6.74(SD2.14))。人間のコンフォート(心地よい状態)尺度の合下位尺度【心地よく運動している】は、がんを持つ患者の方が高く有意差が認められた(がんを持つ患者 18.87(SD4.47)点、一般 17.79(SD3.80))。家族からのサポート尺度の合計得点は、一般の人の方が高く有意差が認められた。

5) コンフォートを促進する支援プログラム

コンフォートを促進する支援プログラムについて、情報ニーズとコンフォートの特徴を検討し、開発する。調査結果より、人間のコンフォート(心地よい状態)尺度と家族からのサポートにおけるがんをもつ患者の一般の比較において、一般よりがんをもつ患者の方が、人間のコンフォート(心地よい状態)を多い状態であることが明らかとなった。そのため、情報ニーズからどのような状態が望ましいのかを検討し、プログラム案とする。

(1) 「10 治療を受けた体験者と語り合って得られる情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が高く、標準偏差も低めであったことから、多くの患者が抱いていると考えられる。また「・・・と語り合って得られる・・・」とあるように、人間のコンフォート(心地よい状態)の下位尺度【つながりを感じている】の状態が生じるのではないかと考えられた。さらに語り合って自身の置かれている状況が整理され必要な情報が得られることで、怖さが軽減し、人間のコンフォート(心地よい状態)の下位尺度【平穩無事である】の状態が生じることも大事なことであったと考えられた。

(2) 「11 分かっていることでも、もう一度説明してもらいたい情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値がやや高く、標準偏差も低めであったことから、多くの患者が抱いていると考えられる。説明された内容も、どうすれば治るのか、自分らしい暮らしをするためには、どうすればよいのか、そのためには何をすればよいのかといったように、その人が答えを見出す。その過程において、医療や医師から、治るあるいは暮らしの場面に即した情報ニーズが出てくるのではないかと考えられる。

(3) 「9 医療者に質問して得られる情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値がやや高く、標準偏差も低めであったことから、多くの患者が抱いていると考えられる。診断、病状の理解、治療法の選択、治療の準備、治療の開始、副作用への対処、生活において、がんをもつ患者の思いや希望が表出されるなかで、疑問点があられる。そうした疑問に対して医療者から回答を得られることで、進むほうこうが見えてくるのではないかと考えられる。

(4) 「2 自分に合った検診(セルフチェック)がわかる情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値がやや高く、標準偏差も低めであったことから、多くの患者が抱いていると考えられる。がん検診は、身体にがんがあるかどうか調べる検査で、職場、市の制度、人間ドック(自費の検診も含む)がある。自分に合った検診をわかり、うけていることで、人間のコンフォート(心地よい状態)の下位尺度【平穩無事である】の状態が生じるのではないかと考えられる。

(5) 「8 治療の度に、説明してもらいたい情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値がやや高く、標準偏差も低めであったことから、多くの患者が抱いていると考えられる。基礎疾患があり、治療を受けることでの心身の変化といった個別性の高い情報ニーズが生じる可能性がある。

(6) 「12 食欲不振時も、食べていくための情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が比較的低めではあるが得点幅の中間得点であり、標準偏差も低めであったことから、比較的多くの患者が抱いていると考えられる。治療中であれば、味覚障害や食欲不振、下痢といった副作用が生じている可能性もある。食べられないときに、食べられそうなものや食べたいものが見いだせていると、生活を送ることができ、体重減少を可能な範囲で予防できると考えられる。対処できる情報があると、人間のコンフォート(心地よい状態)の下位尺度【平穩無事である】の状態が生じるのではないかと考えられる。

(7) 「4 治療と仕事の両立支援についての情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が比較的低めではあるが得点幅の中間得点であり、標準偏差も低めであったことから、比較的多くの患者が抱いていると考えられる。治療後の仕事への復帰は、職場の人からの励ましや仕事を続けていくことへの意欲、家族からのサ

ポートが影響すると考えられる。しかし本調査の結果より家族からのサポートの平均値は、一般よりがんを持つ人が低く、家族へのサポートが求められる。

(8) 「14 不眠を改善できる情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が比較的低めではあるが得点幅の中間得点であり、標準偏差も低めであったことから、比較的多くの患者が抱いていると考えられる。不眠の原因としては、身体的、精神的、社会的、スピリチュアルといった複数の要因があることが予測され、相談することで最善の改善できる情報を得られると考えられる。

(9) 「17 健康食品を見極めて正しく用いるための情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が比較的低めであり、標準偏差も低めであったことから、見極めるための情報をもつ人は平均より少ないのではないかと考えられる。そのため、安全に使用できるかどうか、金額が負担にならないかといったような視点を添えて、専門職者と相談できる機会につなげられるプログラムが必要となると考えられる。そのことで、人間のコンフォート(心地よい状態)の下位尺度【平穏無事である】の状態が生じるのではないかと考えられる。

(10) 「5 病院付き添いや家事を代行してくれる情報がある」

この情報ニーズは、がんをもつ患者の平均値が比較的低めであり、標準偏差も低めであったことから、見極めるための情報をもつ人は平均より少ないのではないかと考えられる。どこに相談し、どんな支援が受けられるのかといった情報が求められている。また、体調不良の際に手助けを頼めるような家族や友人からのサポートも欠かせないと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 金正貴美、野嶋佐由美	4. 巻 46(2)
2. 論文標題 がん患者のComfortに関する情報ニーズの文献レビュー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高知女子大学看護学会誌	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Takami Kinsho, Nojima Sayumi
2. 発表標題 Exploratory Study of Relevant Factors for Human Comfort
3. 学会等名 East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) 2021（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	野嶋 佐由美 (Nojima Sayumi) (00172792)	高知県立大学・看護学部・特任教授 (26401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------